

# 「教育実習における教育実習生への授業評価に関する研究」

研究プロジェクト代表者：三本松 正敏

福岡教育大学附属小倉中学校

## 1. はじめに(研究設定の理由)

現在のところ、教育実習生に対する授業評価は査定授業でさえも学校内で統一的・組織的になされていない。また実習生自身のめざすべき到達目標も、指導教官によりまちまちの規準(基準)である。将来教員を志す実習生としても、確かな規準(基準)で客観性のある指導を受けた方が、教師としての資質・能力が一層向上するであろうし、それを望むところであろう。よって授業を見取る指導者側の眼(評価規準, 基準)を吟味検討し、望ましい授業評価規準(基準)シートを作成し、実用可能なものにして、教育実習生の授業力の向上、教員としての資質の向上をめざすのである。

## 2. 研究の基本的な考え方と進め方

本校が受け入れる教育実習生は全教科にわたる。また、今現在、「授業力」の定義も様々である。よって、「授業力」を見取る評価規準には、ある意味「真なるもの」が存在しない。TOSSのように、指導技術力に特化するのか、または、一時間の授業をデザインする力まで含むものにするのか悩むところである。よってまずは、本校なり「授業力」の定義づけを行うものとした。

現代社会では、即戦力が求められる。この風潮は教師にも同様である。新任だからといって、声も通らない授業しかできない教師は不必要である。このような意味から考えるならば、「授業力」には、声の大きさ、指示の明確さ等の「指導技術力」は授業力の基盤として必要であろう。しかしそれだけではない。教師の専門性から考えるならば、教材価値の解釈力も必要である。どのように教材を解釈していくかで、授業内容が決まるからである。また、技術、解釈力を実際に一時間の授業で運用していく力も欠く事はできない。これらをまとめるならば、下のようなになる。

よって「授業構成力」「授業運営力」まで必要であろう。よって、本研究では「授業力」を以下のように定義する。

授業力とは指導技術力(指示を確実に相手に伝える力)、授業構成力(教材の価値を指導方法に活かす力)、授業運営力(教師と生徒との相互作用を円滑にする力)の総体である。

このような定義に基づいて、評価規準をどのように設定するか。そこでは、持続性の観点から、見取りの簡便さをともなうことが必要であろう。そこで、各教科の本質を貫く概念的な観点からの評価規準を設定することにした。こうすることで、教科を超え、すべての教官が簡便に、かつ限られた短い時間の中で、実習生に「授業力」をつけ、かつ、評価する側も簡便に見とれるからである。また、両者、教師としての資質向上に資することができるのである。よって、評価シートには、以下の点を評価の柱として設定することとした。

- ・授業構成力として、教材の価値が単元や本時の指導方法に活かされているか。
- ・授業運営力として、教師と生徒との相互作用がどのように行われているか。
- ・指導技術力として、相手意識が教師の言動を支えているか。

本研究は、このような柱のもとで研究部が開項目としての全教科に共通する評価規準を設定したシートを提案する。そして、その評価シートを実習で実際に使用した上で、使用した教師からの意見を吸収、改編を加え、よりよいものに磨いていくという進め方をとることとする。以下、平成18年度前期実習において、実習生に示し、実際に使用したものを第一次評価シートと呼ぶ。また、その後、評価した教

師から実用性の観点での意見を収集し、研究部で改編し、平成 18 年度後期実習において使用したものを第二次評価シートと呼ぶこととする。

### 3. 平成 18 年度前期実践について

平成 18 年度前期の実習は、6 月 5 日から 23 日までの 3 週間にわたるものであった。ここで、どのようなシートを使い、研究実践を行ってきたか、(1)使用した評価シート、(2)評価の実際、(3)使用した教師からの意見、(4)具体的な改善点の順に述べることとする。

#### (1) 使用した評価シートについて(第一次評価シート)

「授業力」の定義に則し、使用した評価シートは【表 1】である。

第 学年 組 科 授業観察表		平成 年 月 日 曜日		
指導者名( )				
<b>I 教材解釈力</b>		評価		
○ 教材は教育的に意義や価値があり、義務教育で必要性のあるものか		A	B	C
○ 教材に対する生徒の事前知識・技能が把握され、指導方法は適切か		A	B	C
○ 学習計画(単元構成、学習活動、評価は単元目標に照らして適切か)		A	B	C
○ 本時の授業構成(主眼は明確か、活動は主眼に照らして適切か)		A	B	C
<b>II 授業運営力</b>		評価		
○ 張りつめた学習規律があるか		A	B	C
○ 教師と生徒との距離(生徒の学習への参加度)はどうか		A	B	C
○ 生徒の思考を促し、応答を深くする(思考の流れをつくる)発問力、問い返し力があるか		A	B	C
<b>III 指導技術と評価力</b>		評価		
○ 明るさ、声の明確さ、発問指示の明確さ、話のリズムはどうか		A	B	C
○ 教材、資料、機器等は準備されているか、板書計画はなされているか		A	B	C
○ めあては達成されたか		A	B	C
○ 個への支援はあるか		A	B	C
(総合コメント)				
-----				
-----				
-----				
-----				
評価者				

【表 1】 第一次評価シート

第一次評価シートでは、授業構成力を見るものとして大項目である教材解釈力を設定した。その開項目としての評価規準は 4 つである。それらが、教材の教育的意義、教材に対する生徒の事前知識、単元

目標に照らした構成の整合性、本時構成の整合性等を問うものである。次に、授業運営力を大項目として、3つの規準を設定した。学習規律、生徒の学習の参加度、思考を深くする問い返し力などがそれである。最後に、指導技術力を大項目として、声の明確さやリズム、教材の準備状況、めあての達成、個への支援等を設定した。いずれも文章の意味が達成された状態をB評価ととらえている。総合コメントには、評価のまとめやその他で気づいたことを書き込めるようにした。

## (2) 使用した教師からの意見

以下は、第一次評価シートを利用した教師の意見を、授業力を向上させるためにも加えた方がよい視点、評価の簡便さの視点、指導と評価の一体化の視点から整理したものである。こうすることで、その意見の質を明らかにし、シートの改善点として利用していく。

### 【授業力を向上させるため、加えた方がよいと思われるもの等の観点から】

- ・授業は発問とその応答からできている。その関係上、本時の発問構成を見る規準がほしい。「問いが構造化されているか」これがよく頭に入っていると、授業全体がスムーズに流れ、つながりもよくなる。
- ・指導技術力で、「目配り」「意味ある机間巡視」の項目が必要。
- ・「めあては達成されたか」だけでなく、「達成させるための手だては有効であったか」が必要。

### 【続・授業力を向上させるため、加えた方がよいと思われるもの等の観点から】

- ・教材解釈力の1つめの「○」について。教材の選択は、ほとんど指導教官によるものであろう。価値がわかっているかどうかを見るために、「教材の意義や価値が、授業構成に生かされているか」「教材の意義や価値が、主眼を達成させるための手立てと整合性があるか」ぐらいのほうがいい。つまり、本時の主眼がシャープになっているかどうかが大切である。
- ・めあて達成については、これが、指導技術と評価の項目下にあることを考えると、「主眼が行動目標でシャープに表されていて、その行動が取れるようになるために手立てが有効だったか」の方がよい。

### 【指導と評価の一体化の必要性の観点から】

- ・この評価表のA,B,Cを得点化する。例えばA3点、B2点、C1点。項目の合計を出して、○○点以上が優、○○点～○○点までが良、・・・のように、最終成績に反映させていけばどうか。それを査定授業一回で見取るのか(結果重視)、2週間目の授業、査定授業の合計で見取るのか(過程も重視)。過程を重視するならば、査定でしか見取れない項目は変更する必要がある。

これらの意見の中で注目すべきものは、授業構成力(教材解釈力)は直接実習生の能力ではなく、指導教官によるものが大きいので、削除した方がよいというものである。しかし、前述したように授業構成力は授業力の向上という視点からははずせない。どれほど指導技術に長けていようが、教材の価値、意義、それを活かす構成力がなければ、授業力の向上にはつながってはいかないからである。しかし、抽出生の傾向からみても、この力のなさが現れている。よって、規準の変更は行うこととする。次に指導と評価の一体化を望む意見である。確かに、この評価シートを点数化し、成績と連動させることは、能力育成に寄与するであろう。また、見取りやすさの点から、基準の設定や細かい語句の言い回しなども提案されている。規準を基準的に言い変える文言設定が必要になるであろう。そして、指導技術に関しては、各教科の特性を考慮した、各教科が設定する指導技術への要望も伺える。一律的な設定だけではなく、各教科の特性を活かす方向への対応が必要であろう。

## (3) 具体的な改善点

(1)、(2)の共通点を抽出し、具体的な改善点としてあげるならば、以下のようになる。

- 授業構成力は授業力の背景である。よって、削除はしないものとする。ただし、規準等の設定は、評価基準的な言い回しで見取りやすくする。
- 指導技術力は重視する。教科の特性による、教科設定欄を設ける。
- 評価規準をさらに細分化し、評価しやすいようにする。そのまま B ラインを示すものに変更する。
- 指導と評価の一体化を重視し、点数化できるシートに改編する。その点数を実習成績の参考にする。

#### 4. 平成 18 年度後期実践について

平成 18 年度後期の実習は、9 月 25 日から 10 月 6 日までの 2 週間にわたるものであった。ここでも、どのようなシートを使い、研究実践を行ってきたか、前期の実践同様の形式で述べることとする。

##### (1) 使用した評価シートについて(第二次評価シート)

使用したシートは以下の【表 2】である。また、第一次の実習生の変化、教師の意見から、改編したものを使用したが、改編の要領は以下の【資料 1】の通りである。

##### 【資料 1】 改編の要領

###### 1) 成績に反映させることについて

- ・評価 A は 5 点, B は 3 点, C は 1 点 最高点 100 点。
- ・評定の換算例

A の 3 回の授業を見たとする。

1 回目	80 点		
2 回目	60 点		
3 回目(査定)	70 点	平均	70 点

評定への換算 (換算の理由)

80~100	・・・	優	(A 半数)
60~79	・・・	良	(オール B 以上)
40~59	・・・	可	~39 ・・・ 不可 (C が過半数)

この場合の評定は 良とする。

###### 2) 授業技術力重視になっている。

###### 3) 指導技術は適切かの欄は、各教科独自の視点が存在するので、各教科で設定する。しかし必ず 5 つの視点を設定する。

例) 表情の明るさ、話のリズムや間、意味のある巡視、目配り、声(発問指示)の明確さ等

###### 4) おおまかな評価規準を細分化し、評価しやすいようにした。

第一次評価シートと異なる点は、大項目の一つを教材解釈力から授業構成力に名称変更し、教材だけでなく単元を構成するという意味を強めたことである。さらに、本時の授業構成に関しては、主眼について、さらに小項目へ細分化したことである。こうすることで、単元レベルを意識しつつ、本時重視の見取りにシフトさせることができる。また、授業運営力に関しても、開項目だけであったものを小項目に細分化し、基準 B を示す文言へと変換して見取りやすくしている。指導技術力に関しても同様である。ただし、指導技術そのものを問う項目は、5 項目を教科独自で設定し、教科の特性に対応できるようにした。そして、計 20 の小項目を設定し、すべてに A 評価がつけば 100 点(つまり、A 評価は一つ 5 点、

B 評価は 3 点, C 評価は 1 点)とし, A が半数, 残りが B 以上の場合, 80 点(優)が出せるものとした。  
 すべて B 以上で 60 点(良), C 評価が過半数, 残りが B 評価であれば不可を出せるものとした。このよ  
 うな評価を授業ごとに行い, その平均点で成績に反映させるものとした。

第 学年 組 科 授業観察表		I	II	III	総計
指導者名( ) 平成 年 月 日					
<b>I 授業構成力</b>		評 価			得点
○ 教材の意義や価値が単元の構成, 指導方法, 評価に生かされているか。		A	B	C	
○ 教材に対する生徒の知識・技能が具体的数値で把握されているか。		A	B	C	
○ 本時の授業構成は適切か。					
・ 主眼は生徒の行動目標で書かれているか		A	B	C	
・ 主眼達成のための発問構成は有効か		A	B	C	
・ 主眼達成のための手立ては有効か		A	B	C	
<b>II 授業運営力</b>		評 価			
○ 張りつめた授業の雰囲気を作れたか。					
・ あいさつを含む学習規律は通っているか		A	B	C	
・ 静と動の区別はついているか		A	B	C	
○ 教師と生徒との距離はどうか。					
・ 生徒を学習へ参加させる工夫はあるか。		A	B	C	
・ 生徒に指示や話を聞こうとする態度が見られるか		A	B	C	
○ 生徒の思考を促し, 応答を深くする(技能を向上させる)力はあるか。					
・ 思考の流れをつくる発問力があるか		A	B	C	
・ 問い返して思考を深くする力があるか		A	B	C	
<b>III 指導技術と評価力</b>		評 価			
○ 指導技術は適切か。					
例) 表情の明るさ, 話のリズムや間, 意味のある巡視, 目配り, 声(発問指示)の明確さ等					
・ ( )		A	B	C	
・ ( )		A	B	C	
・ ( )		A	B	C	
・ ( )		A	B	C	
・ ( )		A	B	C	
○ 教材, 資料, 機器等の使い方や板書は適切か。					
・ 教材, 資料, 機器等は準備されているか		A	B	C	
・ 教材, 資料, 機器等は効果的に活用されているか		A	B	C	
・ 教材, 資料の使用計画, 板書計画はなされているか		A	B	C	
○ 個への支援は適切か。					
・ 個への声かけ, ヒント提示等見られたか		A	B	C	
(総合コメント)					
-----					
-----					

【表 2】 第二次評価シート

(2) 評価の実際

ではここで、実習生の中から二名を抽出し、その実際を見てみることにする(別紙資料 C—1, C—2, D—1, D—2, D—3 参照)。なお抽出生 C は理科, D は国語科の実習生である。両者共通の傾向を以下に述べる。

【両者共通の傾向】

- ・ 前期と同様、授業構成力に変化はほとんど見られない。
- ・ 前期と同様、授業運営力、指導技術力はいずれも評価が上がり、力が向上している。
- ・ 総合コメントは、今回でも基本的な指導技術から始まっている。指導技術が一定の水準になってはじめて、関連づけ等の思考を深くする活動への指導へと移行している。

これらの傾向から、明確になったこととしては、前期と同様、指導技術がある一定水準なければ、指導内容の定着はないということであると同時に、指導技術力は、実習において、着実に力をつけることができるものであるともいえる。実習生の 3 週間における成長とは、指導技術、運営力に特に特化されるといえるであろう。一方で、授業構成力には、あまり変化が見られない。やはり、指導教官の指導が徹底的に入った指導案から見取っているためであろう。これからは、指導案の最初の一回目添削時にそれらを見取り、点数化していく必要があるだろう。

(3) 使用した教師からの意見

【授業力を向上させるため、加えた方がよいと思われるもの等の観点から】

- ・ I 授業構成力の「教材の意義や価値が・・・」は現実として実習生に求めても C か B までで、厳しいと思う。2 週間の実習では II 授業運営力、III 指導技術と評価力で精一杯である。この 2 点だけにしてはどうでしょうか。
- ・ 評価シートを実習の記録に貼らせて、ポートフォリオ評価を行えば、さらに授業力の向上につながるのではないかな。

【評価する側の教師の簡便性の観点から】

- ・ 前回に比べ、今回は 20 項目の 100 点で示すことができたので、実習生に基準がわかりやすくなったと思われる。
- ・ 指導技術の 5 項目については、今後教科ごとに改善・検討を行っていけば良いと思う。
- ・ やはり、基準が必要か。教科ごとの開発も視野にいれなければならない。

【指導と評価の一体化の必要性の観点から】

- ・ 授業の展開の中で、授業のめあてと生徒の活動、その活動を仕組む教師の手だてと評価が見とれるようなものがベスト。つまり、評価シートに①めあて、②教師の発問や手だて、③生徒の活動、④評価がつながって見とれるようなものがよいと思う。また、評価シートのそれぞれの項目の数値化は、大変見やすいと思う。ただし、実習当初の授業と査定授業では、かなりの格差があり、数値を平均化して、教育実習評価に反映するのはどうかと思う。数値を平均化するのであれば、3 週間の教育実習のうち、後半の 2 週間を、2 週間の教育実習のうち、後半の 1 週間の授業の評価シートの数値を平均化して、教育実習評価に反映させても良いと思う。特に、査定の授業については、数値の加重配分をして行うのもよし。

これらの意見の質から、注目すべきものは、第一次でも挙げられたが授業構成力の項目の存在についてである。実習生にこの力を求めても厳しいという意見すら出ている。しかし、この力は授業力の背景

ともなり得るもの、かつ、教材研究の深さを問うものであるため、この項目の削除は授業力の向上をねらう限り、削除できない項目であろうと考える。今後は、指導を受ける前の段階を評価し、それを現実として認識させ、教材研究に向かわせる方向でいきたいと考える。さらに、授業力の向上という点から、評価シートを蓄積させ、ポートフォリオ評価も取り入れてはどうかという意見もある。これは、実習生の負担ともならず、自己成長を自己でつかむものでもあるため、効果は大きいと考えられる。よってこれを次回から取り入れていくこととする。

最後に、今回の実践の中で最大の課題となっているものは、それぞれの授業を点数化し、すべての授業の平均で評価を出した方法である。最初の授業等ではどうしても点数は低い。それが指導技術、運営力を中心にほとんどの場合、次第に点数が上がってきている。よってすべての授業の平均では、結果として点が低すぎるといえるものである。すべての授業平均の意味は「過程」を重視する評価の意味であったのだが、査定授業一回での点数化、つまり、「結果」を重視した方が意味あるとの考え方もある。次回からの検討事項として挙げておきたい。

#### (4) 具体的な改善点

(2)、(3)の共通点を抽出し、具体的な改善点としてあげるならば、以下のようなになる。

- 授業構成力は授業力の背景である。よって、前期同様、削除はしないものとする。指導教官が指導する前のものを採点し、教材研究の必要性を高める指導を行う。
- 指導技術力重視に変更はない。今回同様、教科の特性による教科設定欄を五項目程度設ける。
- 前期に続き、評価規準を細分化し、さらに評価しやすいようにする。そのままBラインを示すものに変更する。
- 最終成績に反映させる点数は、査定授業のものか、それともすべての平均か、または、後半の平均の上に査定授業の点数の加重配分か、検討して実施する。
- 実習生の自己評価力を高めるため、この評価シートのポートフォリオを作成させる。実習の記録表にこのシートを日時順に貼らせていくことで対応する。最後には、実習記録をもとに、自己の成長点を自己でエンタリーさせ、それを綴らせて、さらなる授業力の向上、資質の向上を図る。

#### 5. 現時点における成果とこれからの検討課題

現時点における成果と課題について、前述した実践の中から箇条書きにまとめて述べることとする。

##### (1) 成果

- 授業力を育むためには、指導技術力を基盤とした授業運営力、授業構成力が必要であることを明らかにできた点。
- 授業力の中でも、指導技術力と授業運営力は、実習期間での育成が可能であることを明らかにできた点。
- 評価規準をさらに細分化した視点からの評価シートを開発できた点。
- 指導と評価の一体化が図れた点。

##### (2) これからの検討課題

- ・ 評価シートの記録を時系列に蓄積していくことで、実習生自身による自己評価も可能になる。自己で自己の学びの過程をモニタリングできるからである。今後、このようなポートフォリオ評価の展開にまで拡張し、授業力の向上に努めること。

- ・ 教科の特性と評価シートの簡便さのバランスをどのようにしていくのか検討の必要性があること。
- ・ 成績に反映させるための評価シートの点数化は、過程を重視するのか、結果を重視するのか、または、後半の平均の上に査定授業の点数の加重配分がよいのか、検討の必要性があること。
- ・ 評価規準をどこまで細分化していくか、検討の必要性があること。

## 6. 平成 19 年度の取り組みについて

- ・ 前回（平成 18 年度 10 月使用分）から若干の改良を行った。主に、授業構成力・授業運営力についての項目をより具体的にした。また、指導技術の 5 項目については、教科内で独自に設定することにした。
- ・ その日の授業について、必要事項を記入し、放課後の協議会（反省会）時に本人に渡し、評価シートについては、実習日誌に貼り付けをさせる。（評価シートのポートフォリオを行うため）
- ・ 評価シートの点数化について。  
前回までの課題は、全ての授業の得点を平均して評価の得点とした点であった。  
今までは「過程」を重視した評価の方法だったが、それではどうしても点数が低くなるという指摘があった。したがって「結果」をより重視すべきであるという意見が見られた。そこで今回は、全ての授業の平均ではなく、査定授業時の点数を、最終的な評価の対象とした。しかし、査定以前のシートについても、従来通り点数化を行いながら、次への改善点へとつなげるようにしていくことにした。（最初の授業が 50 であったならば、どのような点を改善すれば、「良」「優」の点数まで上げることができるのかが、シートから読み取ることができる。また、そのシートをもとに指導教諭がアドバイス等を行うことによって、より具体的に課題や改善点を見いだすことができるため。）
- ・ 10 月分で最終版とした。そして今回は、実習生の方々にこのシートをどのように活用したのか、また、どう活用できたのかアンケートをとった。  
(アンケート結果については、別紙参照)

## 7. アンケート結果からの考察と、本研究のまとめ

後期教育実習生 41 名からのアンケート結果を分析し、以下のようなことが考察されよう。

まず、問 1 にある、評価シートが単純に役に立ったのかどうかを聞いた結果、全体の 90%以上の学生が「役に立った」と回答した。その理由として、問 2 の結果が示すように、単に自己の課題や弱点が発見されるだけではなく、そこからどのように改善・修正すればよいのか、次の授業へのヒントも記述されており、それを有効に活用したことが伺える。実習生は、それぞれ授業構成力、発問など細かな技術、全体の授業運営などそれぞれ持つ課題も異なる。従って、その学生の実態に応じて適切な指導・助言を行うだけではなく、このシートに記録することによって、次への改善点につなげることができたことがわかる。これは、このシートを作成した上で、もっとも効果的なことであり、作成意義がもっともよく現れたものであると考えられる。

また、このシートを実際にどのくらい活用したのかについては、問 3 にあるように、「少し」を含めた場合、全員の学生が参考にしている。また、78%の学生がある程度、またはよく参考にしている。そして、活用して授業に望んだ結果として、自己の授業技術が少しでも向上したと考え、実感した学生は、全体の 73%を超えた。さらに、向上を実感した理由として、評価シートを活用することを通して、次の授業の改善につなげることができた回答している。このことから、授業を終えたあとの協議会で、反省点を記録し、指導教官が実習生に伝達したことにとどまらずに、次の授業への改善点として活用するこ



とができたことがわかる。この一連のアンケート結果から、本研究がすすめる評価シートの活用は有効であったことがわかる。

しかし、今後の課題として、学生が思っていた評価とは違い、意外な評価があったことが、36%に達した。この結果については、どのような点が意外であったのか、その理由を明確にできなかった。そのなかで、思っていた以上に高い評価をもらった学生、またその逆の学生がいたことに対し、後者の学生に対しては、指導教官側が明確にその理由を伝えた上で、双方が納得した評価にすることが求められよう。

また、指導教官側の声として、最終的に評価する際の明確な基準があるので、有効に活用できることや、曖昧な評価に陥らずにすむことや、実習生にどのような評価がなされているのかを伝えることができる。その際に、どのような点をもっと伸ばすことが求められるのかを、明示することができる上でも活用する意義は大きいなどがあげられる。

このように、2年間にわたる評価シートの改善により、実習生に対する明確な評価や、改善・修正点のよりの確な伝達ができるなど有効性の高いものとして、今後も活用を継続していきたいと考える。